

## 嫌から始まる

松田 妙子

普天間基地問題が政局を揺るがすなど、沖繩が注目されています。社会運動の場では、昔から大きなテーマの1つですが、私にはちよつと痛いのです。

Y子さんとは、ある自助グループで出会いました。彼女は自分が沖繩ルートであることにこだわっていました。私が沖繩戦や基地問題を作品で取り上げていることに対し、「日本人はこんな風に沖繩を見ているんだな、と思った」と言ったのです。私には限りなく冷酷に響く言い方で。同じ自助グループで痛みを分かち合う「仲間」かと思っていたら、彼女は私との間に国境線を引いて、「沖繩」と「ヤマト」に分断して見せたのです。

被抑圧者とされる存在に負い目を感じる人はよくいます。私も彼女も、それを耐え難く感じるタイプの人間でした。例えば被差別部落や「在日」や身体障害・・・等々に対して、自分が当事者でないことが、言いようのないほど重荷なのです。でもY子さんには「沖繩」がある。自分がウチナンチュの血を引いていることに依拠して、「沖繩を搾取し差別してきたヤマトンチュ」を告発して見せる。「これでやっと私にも他人を糾弾する資格ができた」と安堵したがっているかのように。私を「日本人」と呼んだのは、そういうことなのだ、と私は感じたのです。

排除された者が排除し返すのも、よくあることです。私だって、幼い頃から性差別や性暴力に苦しんだ結果、「男性とは絶対、恋愛しない」と誓ったりもしました。でも自分が排除される側になるのは、やはり辛いのです。Y子さんが突きつけた「沖繩」は、毒針のように私を刺しました。それに対し、私は心の中で、この上なく不毛で醜い報復を考えたのです。私たちは性暴力被害者の自助グループの一員でしたが、「Y子さんの経験なんて、セクハラと

さえ言えないほど軽い。私の方が遙かに苛酷な体験をしている」そんな風に考え出すと、もう泥沼です。不幸自慢をして何になる？「被害の度合い」を他人と比較して、順位をつけたがる私も、すでに「被害者」という武器を振りかざす加害者ではありませんか・・・！

ある市民団体の依頼で、イラク反戦のポスター原画を描いたら、「アメリカ兵が美しすぎる」とて、却下されました。「侵略者」の米軍兵などはもつと憎々しく醜く描いて、「罪もない」イラク民衆をこそ、美しく清らかに画面の中央に据えなきゃならないらしい。そう要求されることに違和感を覚えつつ、南京大虐殺の絵では、私は日本軍兵士を鬼のように醜く描いたことを思い出しました。つまりは距離感の違い。私にとつて旧日本軍の行為は「身内の悪業」なので慚愧に堪えないけれど、イラク人とアメリカ人からは、同じくらい距離を置いてたつてこと。ポスターの依頼者たちは、それが許せなかつたんですね。

嫌だな、こんな世界は！「日本人」とか「アメリカ人」とかいった名前の人間が歩いてるわけじゃなく、1人1人が「世界にただ1人の私」なのに。いちいち分類してレッテル貼ってランク付けして、誰が加害者だとか被害者だとか、強者だとか弱者だとか決めて、糾弾したり排除したり。みんなでそんなこと繰り返して、こんな世界は嫌だな！！



・・・などと思っていた矢先、「第3回女人史を学ぶ会」の資料が届きました。私には受け入れ難い箇所も ありましたが、大きなヒントも頂きました。「非所有の所有」「被と非」「座る」などといった言葉から、私なりに考えたこと。

そうか、私が何かの当事者であったり、別の何かの当事者でなかったりしても、その上に座り込んであぐらをかいてちやいけいないんだ。Y子さんが「沖繩」を私有しているように見えたのは、私自身がそうしたからに他ならない。私は自分の背負ってきたものを私有して、自分に私有できないものがあることを悔しがっていただけなんだ。心の中に、見えない勲章を一杯飾りたがっていた。そう、あの阪神・淡路大震災ですらも！ああ恥ずかしい！

考えてみれば私は、在日朝鮮人との関係では、ある程度鍛えられているので、たとえ「この日本人め！」と面罵されたって、さほど驚きません。Y子さんに「日本人」呼ばわりされてあれほど傷ついたのは、私が沖繩と向き合うのに慣れていなかったから。私と沖繩とのつきあいは、まだ始まったばかりなんですね。

世の中には嫌だと思ふことが一杯あって、嫌だと思つてゐる自分も嫌で、「嫌」という漢字が女偏なのも嫌で。でもそういう文化圏に私は生きてる女で、そういう所からしか始まらないのかな、と思つたら。「始まる」って漢字も女偏でしたわ！

2010. 8, 12. 2..30AM\*

